

弁護士として4ヶ月を過ごしての感想

会員 萩原 建太郎



はじめに

弁護士登録をして、早くも4ヶ月が経過しようとしている。

司法修習生の目から弁護士の仕事を見るのと、実際に一弁護士として仕事をするとの違いに戸惑いながら、何とか日々を過ごしているというのが正直なところである。

何よりの違いは、法律家としての責任の有無である。修習生のときには感じることもなかった事件関係者に対する責任が、弁護士登録をした途端に重くのしかかってくることの精神的な負担、それを感じながらどうにか今日までやってきている。

依頼者の期待とのギャップ

弁護士であれば、依頼者を始め、周囲からは、プロの法律家として扱われる。当然のことながら、新人であるからわからなくても仕方がないなどという言い訳は通用しない。依頼者は、法律の専門家としての専門的知識を備えていることを期待して事件処理を依頼しているのである。とはいえ、実際には知識も足りなければ経験もないのであって、依頼者の期待と自分の力量とのギャップに苦しむことが殆どである。文献に当たったり、先輩弁護士のアドバイスを聞きながら、依頼者に回答をして事件を処理していくが、どこか見落としていることがあるのではないかと、誤った判断を犯しているのではないかと不安は尽きない。実際に、手続上の形式的なミスの後になって訂正したこともあった。いつか大きな失敗を犯してしまうのではないかと

というプレッシャーを感じながら、どうにかこれまでやってきているのが正直なところである。

弁護士の仕事とは

弁護士の仕事は、ときには人の人生を左右する面があるということにその特徴があると思う。自分のミスが人の人生を狂わせることもあれば、人を救済し人生をより豊かなものにすることもできる。それ故に、職責が重大であり精神的な負担も大きい反面、やりがいもある職業なのだ実感している。弁護士として仕事を始めてから間がないため、解決に至った事件は乏しいが、事件処理の過程の中で、ときには依頼者から感謝の言葉をもらうことがある。プレッシャーを感じる毎日の中で、その一言は、私にとって仕事に対する大きなモチベーションになっている。弁護士を続ける限り、人の人生を背負っていることの重荷から逃れることはできないと思う。しかし、その一方で依頼者の利益を実現し、依頼者と喜びを分かち合えるのも、弁護士業の醍醐味であろう。

最後に

これからの弁護士人生においても、悩みは尽きないであろうし、今感じているものよりずっと大きなプレッシャーを抱えながら過ごしていかなければならないはずである。苦しみ、悩みながらも、弁護士であるからこそ得られる充実感があることを胸に刻んで、日々研鑽を積んでいきたい。